

横濱市小児科医会ニュース



No. 16 1998年4月1日

時言

診療に心の目も

会長 三澤孔明

今年度から会長を仰せつかりました。宜しく申し上げます。お役を引き受けた私の考えやこれからの抱負は前号の「医会通信」にも述べさせて頂きましたが、これからもその欄に載せさせて頂くつもりです。

富田先生より、「時言」は小児科医の立場から、現実や将来に向けての論説、展望、助言を賜るコーナーなので宜しくとの事でしたが、私には到底そんなところまでいかないので、最近のニュースから話題を拾い、私の考えを述べさせていただきます。

最近新聞誌上を賑わしている衝撃的な事件は、神戸の連続殺人事件に始まり、ナイフによる女性教師や警官の殺人事件で、しかもそれが、あどけない少年によると言う事実です。学校にナイフを持参させない様に、所持品の検査をすとかしないとかも、問題になっているようですが、どんな小さな小刀でも凶器になり得ます。心の中にナイフを持っていれば、どんなものでも凶器になります。「ムカック」とか「切れる」とかいう言葉は、我々医者は「嘔気」とか「メス」を考えますが違ったもので、自分をコントロール出来ないような、これらの子供達に育ててしまったのは、家庭と我々親の責任です。出生率1.43の子子化の問題を考えると、子供同士の付き合いも少なくなり、ますます親の過保護、過干渉に育てられ、皆こんな子供ばかり育ったら大変です。

ひるがえって我々の小児科の診療を考えると、時間に追われ、病気や障害の発見にばかりに留意し、子供の心の動きも一緒に診ることを忘れてはいないだろうか？。小児喘息、肥満、小児成人病、自家中毒症、夜尿、腹痛、指しゃぶり等など小児科領域で出会う患児の60%以上は、少なくとも心身医学的、あるいは総合医学的アプローチが必要であると言われていています。小児科医の子供と保護者特に母親に対する対処の適切であるかどうか、その患児の人生全体に大きな影響を与える事を考えながら、これからの診療に努力していきたいものです。

二つの提言

(14)

薬物乱用

神奈川県立精神医療センターせりがや病院長
岸本英爾

昨年の神奈川新聞に神奈川県警が528kgの覚醒剤を一回の密輸事件で押収したと言う記事が載っています。この覚醒剤の押収量は空前のものであり、神奈川県民全員が覚醒剤に汚染されてもまだ余りある量です。一回の摘発でこれだけの量が押収されたのはかつてなかった事で、いかに薬剤の汚染が広がっているかを示しています。一昨年県下のある高校で摘発された大麻はその後全県下に広まり、最近は中学校にもその汚染は広まって来ています。

昨年暮の文部省の調査では小学6年男子の3.6%、中学3年男子の11.0%、高校3年男子の15.7%が薬物使用は個人の自由と回答しています。今年一月の総務庁の調査では高校生の8.3%が覚醒剤やシンナーなどの薬物を使って見たいと思っていると回答しています。また使ってみたい薬物として50.5%の学生が覚醒剤と答えており、6.5%の高校生が薬物に誘われた事があると回答しています。これらの青少年のアンケートに見られるように、現代の日本の青少年には欧米諸国の若者に見られるような薬物汚染の危険がひしひしと迫っています。

警視庁の報告では高校生の検挙・補導はここ3年間倍増と増加しており、中学生の検挙・補導も年々増加してきています。県立せりがや病院の平成元年度からの統計資料を見ると平成元年度より、平成8年度までに覚醒剤依存症者の新患者数は約3倍となっており、シンナーや睡眠薬等の依存症者の新患者数の減少

傾向に対比して著しい伸び率を示しています。以前は年間の新患者数はシンナー依存症者が覚醒剤依存症者より多かったのですが、4年前より覚醒剤依存症者数はシンナー依存症者数より多くなり、現在では覚醒剤依存症者数はシンナー依存症者数の約3倍に達しています。

何故最近若者の間に、覚醒剤や大麻などの薬物依存が広がってきているのでしょうか。一つは経済大国日本が各国麻薬組織のターゲットとされて来ている事が原因でしょう。それだけの事なら、薬物が海外から流入するのを阻止すれば解決できる事なのですが、それ以外の要因として日本文化の脆弱性がそれを助けている事があげられると思います。外国文化の無批判な受入れ、伝統的な日本文化の過小評価、内申制度・偏差値教育など教育の荒廃、親子関係の変化、家庭の崩壊等々、この様な中で最近の若者の中には生き甲斐を失い、いかに生きるかの目標も信念も見失ってしまっている者が増えています。そこに覚醒剤や大麻が音もなく忍び寄って来たのでしょうか。これらの日本文化の脆弱性は薬物の乱用に限らず、教師殺害、おやじ狩り、いじめ、自殺、不登校、不純性交など様々な社会問題を引き起こしています。

大人社会は青少年が薬物を持って告発している真の意味を深く悟って、正しい方向と方策を出さねばならないでしょう。今までの大人社会は追い付き追い越せと、物質的豊かさのみを求めるばかりで、心の豊かさについて自らの修養を怠ってきたのではないのでしょうか。それは日本の文化、社会、経済、政治などのあらゆる面に表面化しています。それを青少年は薬物依存と言う形で表面化し、自己表現しているのではないかと思います。私達大人はもっと青少年を信頼し、若者達ともっと一緒に考え、苦しみ、悩む事が必要でしょう。今の大人社会はあまりにも人間不信に満ち満ちてはいないのでしょうか。外国文化から学ぶと共にその無批判な受け入れをやめ、伝

統的な日本文化を正しく評価し、子供達が自由にものを言えなくする内申制度や知識のみを偏重する偏差値教育を止め、劣悪なテレビ番組、テレビゲーム、レンタルビデオを改め、子供達が伸び伸びと成長できる社会を保障し、親子の信頼を回復し、家庭でも子供達が安らぎを感じるようにする事等々、そのような環境を若者達は私達に望み、教えているのではないかと思います。

村尾泰弘氏の講演を聞いて

中区 野崎正之

平成9年10月28日、はまぎんホールピアマレで、県医師会主催による薬物乱用防止のための教育講演会が行われた。中でも横浜家裁・調査官 村尾泰弘氏の講演「薬物乱用を巡る児童生徒の心理と社会環境」は実話だけになかなか聞きごたえがあった。

実際のシンナー及び覚醒剤の補導事例：

シンナーを吸った上、自動車の無免許運転で事故を起こして警察に逮捕された18歳A子の事例。

覚醒剤に手を染め、結局ヤクザの手に落ちて売春婦となっていたところを幸いに救助され、現在女子少年院に収容されている17歳のB子の事例。

シンナーにしる、覚醒剤にしる薬で侵された体を癒すには、まず薬を止めることが基本だが、身体的な問題だけではなく、生活暦などをよく調べてみると、心理的な問題を抱えていることが多く、この辺を解決してやらないと回復が難しい。しっかり解決して置かないと、すぐに又手を出して、元の木阿弥になりかねない。

問題を起こした子の親に面接すると、しばしば「家ではとても良い子で、そんなことをするとは思っても見なかった」いう返事が返って

くるが、猫かぶりを親が見抜けなかっただけの話で、親と子の対話が少ない、とくに父親との関わりが少ない場合、問題が起きやすい。

A子の場合、家庭でも、友達付き合いの中でも、本当の自分の地でなく、いい子を演じていたが、シンナーを吸うと、隠されていた本当の自分が現れてきたようで、普段の自分と違う自分を「怖い自分」と感じていたらしい。本来の自分として生活せず、つねに猫をかぶっている生き方には精神的な葛藤が多い。本来の自己を開放するための手段としてシンナーが利用されたのであり、本来の自分のままに生活するように指導することで、薬から脱却出来たとのこと。単に薬の身体的毒性を説いて、止めさせようとするのではなく、薬を求めるようになった動機に対する深層心理的アプローチが必要であると。

B子についての話。昔からシンナーと覚醒剤・麻薬は悪のランクが違うといわれてきた。シンナーはビニール袋などで吸うだけで済むが、覚醒剤などは注射によるので初犯の場合、まず自分で痛い注射をするというのには、いささか抵抗があり、シンナーと一線を画すると言われていた。しかし最近ではマリファナのように火で炙って煙を吸うことで、簡単に陶酔できるようなものが流行し、シンナーの段階を経ず、いきなり覚醒剤などに走るケースも多くなったとのことである。

シンナーなどで再三補導される場合があるが、なかなかやめられない理由として：

1 罪悪感が少ない。これは他人には迷惑を掛けてないという考えが根底にあり、例えば具合悪くなくても、それは自分のことで、他人がとやかく言うことではない。(これは自分が気持ち良くて、小遣い稼ぎになり、しかも他人……オジン……を喜ばせる援助交際、テレクラのどこが悪いという発想と同じ)氏はこれを問題の私事化と表現された。

2 学校の先生や警察官や調査官等が、とやかくいったところで、ことシンナーに関して

は、体験した自分の方が分かっている。早い話、酒飲みの気持ちは酒飲みじゃなきゃ分からない。シンナーをやらない人間にはシンナーは分からないことだという信念をもっている。

3 薬も酒と同じで、生まれつき強い人と、弱い人があるので、先輩はガンガンやっているのに向になんともないとか、自分だけは大丈夫といったような根拠のない気安めもある。

4 薬で体が悪くなるという知識を持っている場合、それが裏目に出ると、(体がボロボロになるのが怖い、怖いから薬で誤魔化す)というケースもある。

薬物乱用、いじめ、不登校、性の逸脱行動のいずれにも共通するのは、個人の欲望の肥大化といえる。

対策としては、崩壊しつつある。「家庭」の再建が必要である。とくに父親の存在感が薄れたのが問題で、あまり物分かりがよくて、親子というより友達のような親子があるが、親は親であり、子は子であるという根本を親子ともどもしっかり認識することが大切ではなからうか。学校の先生についても、あまり生徒に狎れるのは同様に問題であろう。

(文責 野崎正之)

医会通信

今月で、私が会長のお役を承ってから一年になります。この一年間は、今迄の歴代会長の仕事や行事を踏襲するだけで精一杯でしたが、有能な副会長を始めとする常任幹事スタッフの方々の協力と、会員の皆様の暖かい目のもと、どうにか一年が経ちました。大変有り難うございました。

今年度は、庶務報告にも有ります様にお陰で四回の学術講演会の開催と学校医部会事業のサマースクール、マリンスクール、小中水泳大会等の諸事業に協力出来ました。又市広報部の事業TVKテレビの、出演者人選協力

も致しました。今年3月に医療費改正が有り小児科も少しアップするとの事ですが、子供の医療費は高齢者の十分の一と言われ、最近の環境の整備と予防事業により、小児科の子供受診率は四分の一に減っております。平成8年度世界最低の出産率1.43をふまえて、小児科の前途は少子化の解決への努力、小児医療の密度を濃くする事、予防接種、乳幼児の健康診断、保育園、幼稚園、小中学校の学校保健などに対する積極的な参加、に有る事は皆様よくご存知の通りです。小児科医会もこの方向に進む事に協力して行きたいと考えます。

今年度私の考えている事は、学術に関する研究会、集会に出来るだけ多くの会員が参加する事。特に最近各地の部会でいろいろと開かれていますので、有益な講演会等の情報を小児科医会会員にお知らせし参加出来る様に、小児科医会担当市医師会事務局事業一課に知らせて頂く様お願いします。

新しい会員名簿作成の件

現在の会員名簿は3年前に作られたものですが、日進月歩で大分変更が有り、ご返事の頂けないケースも沢山あります。又新しい会員の方も増えました。新しく会員名簿を作りましたので、皆様の情報の範囲で移動変更が有りましたらお知らせください。

要望書の件

予防接種の個別化と委託料、風疹の通年化、育児相談の系統化と統一化、診断書など、子供の健康を守る運動は、市医師会の各部門で、大変な努力をしておりますがまだまだ問題があるようです。本小児科医会でもこれらに対する要望書を今年一杯にも出す提案を総会に出そうと過日の役員会で決定しました。小児科医会では過去に故瀬川先生のご努力もあって昭和63年に「三種混合個別化」の実績と、平成3年にツ反応とBCG個別化の要望書を、市医師会を通じて市衛生局に提出しております。

(会長 三沢孔明)

研修会抄録

川崎病および喘息治療に対する私見

京都大学医学部小児科教授 古庄 巻史

川崎病の原因は不明のままであるが、感染症またはそれに続発する免疫反応であろうことは論をまたない。本症は乳・幼児の病気であること、頸部リンパ節が腫大すること、本邦ではどこにでも発生すること、人から人に殆ど伝染しないこと、文明先進国に多い、などが特徴である。このことが本症の病因は極めてcommonな病原微生物で、多分、口腔内に存在し、伝染力や病原性は弱いものと考えたい。しかしその微生物に何らかの環境因子が二次的に重なり合うと、初めて病原性（毒素または免疫活性物質）が発揮されるものではなかろうか。その環境因子とは近年、一般家庭で日常よく使用されるものに違いない。

私は口腔内常在菌であるサンギス菌と洗剤等に含まれる界面活性物質、口腔内の糖分の相互関係から、口腔内に簡単に産生される多糖体である α -グルカンに注目している。

小児気管支喘息の治療は薬物療法の進歩に

よって近年、飛躍的に向上し、コントロールしやすくなった。それは気管支拡張薬によって即時型反応を治療し、予防しようとする考え方から、気道の炎症を治めることが基本的に重要であり、必要に応じてアレルギー反応に対する治療を行うべきであるとする方針に変わってきたからである。

一方、近年あまり行われなくなった減感作療法は原因療法として捨て難い療法である。われわれはダニ由来の主要抗原であるDerf₂分子内のS-S結合部分のシスラインをセリンに置換した遺伝子組み換えDerf₂を作製した。本剤はRASTの系で、特異IgE抗体との結合は弱いが、T細胞エピソードは保持しており、Tリンパ球の増殖反応は生体由来のDerf₂と同等である。すでに動物実験レベルでは減感作に成功しており、近い将来、人の減感作療法への応用が可能になると考えている。

第4回横浜市産婦人科

小児科研究会 抄録

(平成9年12月12日)

『HIV母子感染』

神奈川県立こども医療センター
感染免疫科 赤城 邦彦

はじめに

1981年に世界で初めて成人のAIDS症例が、1982年には母子感染AIDS症例が米国で報告された。その後全世界で大流行をみているの

は、ご承知のとうりである。最近のHIV感染症に関する幾つかの進歩、すなわち、病因・病態に関する新知見、HIV-RNA定量法の臨床的应用、新たな抗HIV剤の臨床应用と併用療法の効果、日和見感染症の予防・治療の進歩、HIV感染妊婦へのAZT（ジドブジン）投与による母子感染予防などにより、米国では1996年には成人のAIDS患者の死亡率が初めて減少し、また母子感染AIDS患児数も1994年から減少傾向に転じている。しかし、アジア・アフリカでは患者・感染者の増加が著しく、母子感染がAIDS患者の10%を占め

るに至っている。

厚生省エイズサーベイランス委員会の報告では、本邦では、1985年に初めて成人のAIDS症例が、1990年には母子感染例が確認されている。母子感染例に限ると、1996年12月までで29名と非常に少ないが、今後女性の感染者の増加（感染女性の90%以上が生殖年齢である）につれて、感染女性の妊娠の管理、感染女性から生まれた児の管理や母子感染患児を診療する機会もあると思われる。ここでは、HIV母子感染の臨床的特徴、成人との違い、本邦での母子感染の現状、感染患児の治療、および母子感染予防対策（産科的対応とAZT予防投与）についてふれたいと考える。最後に1996年6月にCDC（米国疾病管理センター）が提出した針刺し事故時の危険度と予防投薬に関する勧告についてもふれる。

おわりに

AZTによる母子感染予防投与により、母子感染率が25.5%から8.3%と1/3に減少したというACTG076治療結果を受けて、米国では、妊婦へHIV抗体スクリーニング検査を勧め、感染妊婦へはAZT予防投薬を含む選択肢があることを提示し、インフォームドコンセント後、実際にAZT予防投与を受ける感染妊婦の増加がみられ、母子感染の減少を認めている。この予防法の感染妊婦への適応基準（臨床所見、CD4数、HIV-RNA量）、

長期的副作用、妊娠中期～後期／分娩時／新生児のどの時期のAZTの投与が予防に最も重要か、耐性ウイルス、等の問題がなお残されている。一方、分娩法による母子感染率も差がみられるようである。これらの母子感染予防対策は、本邦でも十分検討に値するものと考えられる。

また小児科医にとっては、感染妊婦から生まれた児のフォローアップ体制の整備、児の感染の有無の診断、感染患児の日和見感染（特にカリニ肺炎）の予防の必要性などについてもある程度理解しておく必要がある。それとは別に、患児の症状が発端となったHIV感染の診断、さらに母親や家族のHIV感染が明らかになる場合も想定される。これらは、体重増加不良、肝脾腫や肝機能異常の持続、繰り返す下痢、反復性気道感染、繰り返す驚口瘡など、一つ一つは小児によくある症状であるが、繰り返すことや難治性であることが特徴である。特に急速に進行する肺炎には注意する必要がある。血液所見では、血清γグロブリン分画の増加（まれに低下）とIgG、IgA、IgMの高値なども参考になる。まだ患者数が非常に限られているためになじみがないと思われるが、いつ遭遇してもよいように心構えておく必要があると考える。産科医と小児科医の連携がこれほど大切な疾患もあまりないと思われる。

医会だより

東部小児科医会

北部小児科医会

2月23日、青葉区医師会館で北部小児科医会例会が開かれた。青葉、都筑の保健所長をお招きし、青葉保健所金子所長の乾杯で、28名の出席を得て、和やかな会となった。

まず、新入会のフレッシュな2名の先生の自己紹介があり、是非入会させていただき、一緒に活動したいとの気持ちを述べられた。

議題は

1. 保健所乳幼児健診協力出動について
2. 横浜市北部夜間急病センター出動の件。
3. 保育園医、学校医部会について
4. 保健所職員と北部小児科医会懇談会（3月6日開催）について
5. その他

以上について、全員にマイクが廻されて活発な意見の交換がなされた。

その中の主なものを記すと、学校や保育園で溶連菌感染症や伝染性紅斑等の治癒証明書を書いてくれとたのまれるが、学校保健法にそれ等病名は特に書いてないがどうしたらよいか？文書料？又カゼで休んだがインフルエンザと書いてもらおうと欠席にならないとの事で証明書を書いて欲しい等の云われた時の対応はどうしたらよいか？親の希望に沿って書く先生、料金を決めている先生、無料の先生等々、早急に市の学校医部会、保育園医部会、小児科医会で統一した線を出して欲しいとの結論であった。

予防接種について、横浜市衛生局から、平成10年度新入学者用に、その必要性や、受ける時期等、判りやすく書かれたものが学校に配布されており、是非活用して欲しいとの発言があった。

平成9年10月9日「こどもの心の健康、非行、暴力、不登校等について」東海大学精神科教授・山崎晃資先生をお招きして、こどもの話をよく聞き、仲良くなると、ほんの一寸した一言が立ち直るきっかけになることがある等、貴重なお話を聞いた。以上簡単に北部小児科医会の近況をお知らせします。

(会長 有本 泰造)

平成9年5月の総会での議決を受けて、いままで曖昧であった「会員」の継続意志の確認と医師信用組合からの会費自動引落し制（会計担当三保先生の御尽力）を早速実行致しました。その結果、予想どおり数名の内科系の先生方から脱会希望がありましたが、逆に新入会を希望される先生方も多く、現在正式な名簿作成に取り組んでいます（50名を越える模様）。これにより益々活力ある会に進展できると思います。主な活動としての「勉強会」は5月、7月に続き9月に日本医大付属第二病院小児科橋本清教授が「乳児の発達の診かた」をビデオを使いながらわかりやすく講義して下さい、自己流になりがちな乳児検診のポイントを再確認しながら勉強致しました。11月には横浜労災病院に静岡県立こども病院小児科医長長谷川知子先生をお招きし、「臨床遺伝の話」と題して障害児に対する基本的なアプローチのABCをダウン症を中心にお話下さり、毎日「カゼ」ばかり診てマンネリになりがちな私達開業医に心温まる強烈なメッセージを心身医学の面からアピールして下さいました。そして、本年1月には川崎市立病院小児科部長武内可尚先生が「小児感染症におけるSAA測定の意義」と題してウィルス感染の診断にも有用な、CRPでは反映されない新しい炎症マーカー「SAA」について詳しくお話し下さいました。初めてこの言葉を聞く先生方も多く、日進月歩の医学の潮流を膚で感じとる事ができました。尚、今後の運営については幹事会で、2、5、7、9、11月に鶴見区と港北区各々交代で会を開催する事を確認しました。

この1年で港北区だけでも小児科単科で新規開業された先生が3名おられ、世代交代が進みつつありますが、会員相互の理解と親睦を深めながら、会の運営を行っていきたくて思っておりますので、宜しくお願い致します。

(会長 中野 康伸)

西部小児科懇話会

中区小児科懇話会

前号掲載以降の例会は以下の様に開催されました(第193回以外は市民病院講堂)。

第191回, 平成9年9月18日(木), 「小児結核」, 症例呈示: 市民病院・長谷川絵美先生, 千葉優子先生, 講演: 国立小児病院呼吸器科医長・雫本忠市先生

1) 父が開放性肺結核であった乳児例の診療方針, 2) 姉の肋骨結核より感染したと思われる14歳のPott病-以上の症例の呈示後, 雫本先生の小児結核全般に関する解説をいただきました。ツ反の正確な施行法・BCGの確実な接種法からはじまり, 実際の見地からの詳細な講演で, 極めて印象的でした。

第192回, 平成9年11月27日(木), 「最近西部小児科懇話会メンバーから紹介されてきた症例の分析-1) 化膿性髄膜炎」, 症例呈示: 市民病院・那須智仁先生, 講演: 市民病院副医長・三浦大先生

最近6ヵ月間に懇話会メンバーより紹介されてきた4症例のうち, インフルエンザ菌2症例, 肺炎球菌1症例を呈示しました。的確な時期に紹介され, 全例後遺症なく治癒しましたが, 各紹介医からも初診時の状況が発表されました。なお, 市民病院の12年間の同症の分析が, 三浦先生より発表されました。

第193回, 平成10年1月29日(木), 「日常診療における小児疾患」, 講演: 市民病院副医長・三浦大先生

日常の小児科外来で遭遇し得る心疾患として, 心筋炎, 発作性上室性頻拍, 細菌性心内膜炎などの症例が呈示されました。胸痛や心雑音を主訴に来院した場合の鑑別診断についても言及がありました。近年A群溶連菌の重症化が進んでいることから, リウマチ熱の再興にも注意が必要との指摘もありました。講演終了後, 新年会に移り, 久しぶりに出席された名誉会員の小島正典先生を中心に, 和やかな懇親が続きました。

(横浜市立市民病院小児科 清水 節)

中区小児科医会も会を重ね, 先日160回目の回をもちました。

今年初めてということで, 新年会を兼ね, 楽しく, 活発に意見を交換しあいました。

開業医と病院の先生方との懇親も勿論ですが, 病院の先生方同士の交流の場になっており, 病々診連携といった感があります。

何となく気になっている事を, 何となく話し, 聞いてもらう。うなずいてもらったり, エーッ? と思ったり, 思われたり, 考えを整理してもらったり, 私にとっては, とても有難い会です。

会員の向山先生が, 地域医療に貢献されたという事で賞を受けられ, 両陛下に謁見されたという, ニュースがありました。

皆で, 「スゴイ, スゴイ」と, 珍しいお話を聞かせていただきました。

会長が, 入江先生から寺道先生にバトンタッチされました。

入江先生, 本当に有り難う御座居ました。

寺道先生, どうぞ宜しくお願いいたします。

子育てのなかで, カンガルー方式というのが, 今, 話題になっているそうです。

お腹にスッポリと赤ちゃんを入れて, カンガルーのように抱きかかえて育てるといっていいのでしょうか。何かとても居心地が良さそうです。

母親の肌のぬくもりや子守歌を奪ってしまったのは何なのでしょう。

父親の強さは何処に行ってしまったのでしょうか。すぐ近くにあればあるほど, 見付けにくいのかも知れません。

中区小児科医会はカンガルーかも。

(大本 赫子)

南部小児科医会

港南区, 南区, 磯子区の3区の小児科医を中心に, 当会は構成されています。平成9年4月に会長が交替し, 八木先生(港南区)が会長となりました。

県立衛生看護付属病院, 南部病院のご協力もあつ

て、年5～6回の講演会あるいは勉強会を開催しております。平成9年度は殊に盛りだくさんな内容で、毎回多数の会員が出席しました。

6月「小児の皮膚疾患」をテーマに、県立こども医療センター馬場先生をお招きしました。日ごろ？と思っていた皮膚病変のスライドが解説つきでふんだんに登場し、さっそく翌日の診療から役立っています。

9月「日本小児栄養消化器病学会」が開催されました。衛生看護付属病院小児科・豊田部長が会頭を努められました。南部小児科医会のメンバーも多数参加し、台風という悪天候にもかかわらず、盛会でした。

10月「抗菌薬の使い方」を付属病院院長・松本先生より御教えいただきました。新興感染症、再興感染症にまで話題が及びました。

1月「小児気管支喘息」についてアレルギーセンター勝呂先生にお話しいただきました。あらかじめ集められた会員アンケートを基に、充実した内容の質疑応答でした。

3月には講演会とともに懇親会がひらかれます。会員相互の親睦を図るとともに一層の内容の充実をめざして平成10年も活動していこうと思います。(斎藤 綾子)

南西部小児科医会

① 第7回小児疾患談話会

日時 平成9年11月19日(水)

午後7時～9時

場所 横浜栄共済病院

a) 横浜栄共済病院小児科における最近10年間の夜間・時間外救急の集計と今後の課題

講師 梶ヶ谷保彦先生

b) 開業医よりの紹介患者の内、検査結果やその後の経過等、供覧及び示唆に富む症例について、各主治医からの報告。

c) 開業医からの紹介患者の内、特にリクエストのあった症例について、2～3の詳細な報告があった。

② 横浜小児木曜会(第15回)

日時 平成9年11月20日(木)

午後7時～8時30分

場所 国際親善総合病院

講演 「外来でよく見る小児の内分泌疾患」

講師 順天堂大学医学部小児科助教授

有阪 治先生

③ 戸塚区小児疾患研究会

日時 平成10年1月20日(火)

午後7時～8時30分

場所 横浜西部総合保健センター

講演 「休日急患診療所における小児疾患の診かた・考え方」

講師 横浜市大医学部講師 横田 俊平先生

◎休日診療所に出動された、他科の先生方に、特に参考となる様な内容のお話を頂いた。

以上、紙面の都合上、内容の詳細を省略して、御報告します。

(会長 内山 英男)

金沢小児科医会

金沢区小児科懇話会症例検討会を平成9年11月28日に横浜南共済病院に於て行った。演題と報告者は下記のとうりであった。

1) 4歳から始まった反復性腹痛が10歳時に左腎盂尿管移行部閉塞と診断された1症例。(田中)
2) 頸部の硬直、四肢の脱力と言葉が出なくなったことを主訴に入院した6歳男児－心因反応－(成相)
3) 急性散在性脳炎の3歳男児例。(中島)
4) セレスタミンの頻回使用により副腎機能低下と低身長を呈した9歳男児例。(鏑木)
5) ムンプスウィルス感染の関与が示唆された自己免疫性溶血性貧血の1例。(関)

出席者は18人で前回より少なかったが各演題に活発な質疑応答がなされ、鋭い質問が続出し時間のたつのもわずする程とても勉強させていただいた。

(会長 黒住 浩子)

＝ 会 計 報 告 ＝

平成9年度会計（中間）報告

（H10. 2. 20現在）

現在高 2,048,895

内訳 現金 8,341

郵便貯金 1,649,671

貯金センター 5,930

医師信用組合 384,953

2月20日現在 会費納入状況 293名

（8、9年支払いの先生の延べ人数）

（会計 小林 幹子）

＝ 庶 務 報 告 ＝

1 会員数（1998年版名簿収載）323名

2 研修会

H9. 10. 24 於 市健康福祉センター
4F ホール

演題 小児アレルギー疾患の最近の治療

講師 京都大 発達小児科学

古庄 卷史教授

3 小児科・産科研究会（第4回）

H9. 12. 12 於 市健康福祉センター
4F ホール

演題 HIVの母子感染について

講師 こども医療センター 赤城 邦彦先生

4 常任幹事会

H10. 1. 23 於 下鴨茶寮・横浜

5 役員会

H10. 2. 20 於 大雅飯店

6 広報活動

H9. 10. 1 小児科医会ニュース第15号発行

7 その他

小児保健事業の推進

学校保健諸事業への参加

（庶務 大西 三郎）

1998年4月1日発行

横浜市小児科医会ニュースNo.16

題字 五十嵐鐵馬

発行人 横浜市小児科医会

代表 三澤 孔明

編集 横浜市小児科医会広報部

事務局：〒231 中区麦田町4-99

Tel 622-8676（野崎方）